中島敦の異世界表現
――『古譚』をめぐって――

奥野政元

現実と異世界をさまよう、独特な空間をよく描いた中島敦は、初期の諸作品では、現実存在の不確かさ、あるいは現実の異常さを、むしろ強調するところがあった。それは、「狼疾記」や「カメレオン日記」などに顕著に見られる。今あることの必然性の無さへの不安、宇宙の消滅を認知しながら、存在の意味も理由も見出せない不条理の感覚、このような状況をくり返し描き続けた彼にとって、現実を超越した異世界の理想的な空間に憧れたり、思いをはせるような要素はあまり見られない。理想や夢への憧れそのものは、彼のうちにやはりあったと思われるが、そうした夢を、夢そのものの空間として、自ら異世界を創造するような要素が見られないのである。たとえば晩年近く昭和一七年に発表された「光と風と夢」は、独自な異世界を追い求め、堅固な創造空間を織りなす作品を書き、自らも故国を離れて南洋に移り住んだスティーヴンスンを題材にしたものであるが、それはスティーヴンスンの日記に基づいて、創作活動の悩みや、病気のこと、さらには南洋での政治問題などに煩わされる現実の苦闘を再現したものであり、中島自身が選んだ題名も、それに相応しく「ツシタラの死」という即物的なものであった。彼にとっては、夢を語り続け、広大な異世界空間を創造した浪漫的作家が向き合った、現実そのものの悲惨と苦悩と慰安にこそ、引きつけられるものがあったのであろう。

しかし一方で、たとえば篠田一士などは、「中島敦の文学的世界の根底には近代ヨーロッパの唯美主義があった。」と言い、それはウォルター・ペイターの名前によって代表されるものだと指摘している。さらに篠田は日本におけるペイターの意味に触れ、上田敏を中心とする一九一〇年前後の「パンの会」などの昂揚に言及し、第一次大戦後の衰退はあったが、ペイター的唯美の理念は決して滅びはしなくて、一五年戦争のさなかにも、保田与重郎の内奥を支配した美意識、「マチネ・ポエチック」の作家たちの

内奥にあったのも、こうした優美の心を核にしたものだったという。そして中島敦の文業の全体を貫くものにも、唯美をもとめる純潔な心があったと言うのである。つまり中島はロマンティクなものエキゾチックなものに、かぎりない憧憬と愛情を感ずると同時に、そのような幻想に無条件に飛び込んでいく人間の滑稽さと、アナクロニックな愚劣さに、軽侮と憎悪も覚えるところがあり、この両面を冷徹に見据えるアンビヴァレンツな心理に引き裂かれていた、と言うのであろう。唯美をもとめる純潔な心と、冷徹な論理や鋭い知性に貫かれた批評精神、この分裂が止揚されるのは、死を前にした瞬間であり、初期の「斗南先生」の最後の瞬間に、伯父の運命を自らの運命として内面化し得た、と篠田は指摘している。[1] この指摘は、中島の文学世界をよく解明し得ていると考えられる。「光と風と夢」が本来は「ツシタラの死」という題でもあったことも思い合わせられるように、死に直面することでしか、己の唯美をもとめる純潔な心を、飛翔せしめ得ないということでもあろう。逆に言えば、冷徹かつ鋭い分析的批評眼の徹底が、唯美の心を表出するという逆説的な表現方法が、中島の本質でもあったと言うことである。

以上の事を確認するためには、『古譚』に収められた四篇を眺めてみれば良い。中でも最も有名な「山月記」は、人間が虎になるという怪異談でもあり、人間と異世界の交渉にもかかわる話が題材である。唐の「人虎伝」がその題材となったものであるが、中島がその素材に付け加えた最も重大な処は、虎になった李徴の原因説明にかかわる長々しい弁明である。変身の事実を知った彼は、まず「全く、どんなことでも起り得るのだと思うて、深く懼れた。」と言い、なぜこうなったかは分からぬと言いながら、一方では、思い当たることが全然ないでもないと、自分の性情につき、「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」と表現して、その性情故だったとも説明する。最後には、残された妻子のことに触れ、後のことを袁傪に頼んだ上、飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の貧しい詩業の方を気にかけるような男だから、こんな獣に身を堕すのだとまで自嘲する。現在この作品は、高等学校国語科のテキストにも採用され、日本中の多くの高校生が学んでいるが、教材としての取り扱われ方は、李徴の虎に変身した原因や理由に、話題が集中するようで、今あげたような処が強調されて解釈されているようである。それはまるで、通俗道徳の普及伝達の様相さえ、想像させる光景でもあるが、中島の付け加えた李徴の内面心理の分析や説明は、そのような解釈もあり得ることを伝えているところもある。ただこの説明は、あくまでも「分からぬ。」という深い懼れの上に基づくものであり、弁明が意味をなさぬところのものでもあることに、注目すべきであろう。こうした意味をなさないところでの厳しい自己分析と批評、これが作家中島の特色でもあって、そのことによって異世界のリアリティが逆に保

証される趣きこそが、彼の個性的なところでもある。

この特色は、他の三篇にも共通して見出すことが出来る。「狐憑」は、古代スキュティアの未開人種であるネウリ部落のシャクに、憑きものがした題材をとりあげたものである。彼に憑きものがついたのは、北方の遊牧民ウグリ族に襲われて殺された、弟の右手と首のない屍体を茫然と眺め続けて以来の事である。シャクの最初の譫言は、その内容から彼の弟の魂が、兄に忍び入って言わせたものだと、部落の人々に考えられたが、次第に彼の話が多様に展開され、聴衆も増えてくると、彼自身もおもしろくなって止められなくなる。しかもその語りぶりには、狂気じみたところもないし、話の条理も立ちすぎていて、何よりもシャク自身が、憑きものとは違うことに気がついているというのである。やがて彼の物語は、周囲の人間社会に材料を採るに及び、長老たちの反感を買い、ついに部落の有害無用者として処分され、その肉を人々が食べたというのである。このようにして、シャクは古代における霊的感応を受けた物語作者の起源を明らかにするよりは、作家と社会との関係を象徴するカリカチュアーとしての様相を、強く帯びることになるのであり、その原因に、中島の批評精神の所在が確かめられることにもなる。

次の「木乃伊」は『古譚』四篇の中でも、最もこうした批評性の少ないものであるが、それでも波斯の軍人パリスカスが、使ったこともない埃及語が理解でき、やがてエジプトのある墓室で出会った一体の木乃伊の顔を見た瞬間、それが前世の自分であることに気付き、その木乃伊に魂が乗り移ったかのように、前世の経験が蘇ってくるが、さらにその自分がその前世の木乃伊と出会って、まるで合わせ鏡のような無限の連鎖反応に襲われて、ついに発狂してしまう描写には、前世体験の異様な内実そのものよりは、前世から前々世への自分と出会うという恐怖体験そのものの異常性を、強調する態度の方が強い。そこに、分析的客観的解説じみた特色も抜きがたく出てくる。パリスカスの性情を説明して、夢想癖があることを述べたり、前世の木乃伊に出会った瞬間の彼の身体上の変化を、化学者のような視点で説明したりするところに、それがよく示されている。

最後の「文字禍」は、以上の『古譚』四篇に共通するテーマ、その核心を明らかにする。つまり、我々が外界や自己自身についての正しい認識を得る際に使用する、言語・言葉の精霊の祟りについての寓話である。この祟りとは、ナブ・アヘ・エリバ博士によって、「奇体な分析病」と明確に名づけられている。「老博士は浅薄な合理主義を一種の病と考へた。そして、其の病をはやらせたものは、疑もなく、文字の精霊である。」というのである。博士は文字の霊の存在を確かめるために、一つの字を幾日も睨み暮らしているうちに、その字が忽然と分解して、単なる直線の集まりになって了って以来、すべてのものが、同じように意味不明の

ものになってしまったのである。しかも同じ現象は、文字以外のあらゆるものについて起こりはじめ、ついに「人間生活の凡ての根柢が疑はしいものに見える」ようになった。これがすべて、文字の精霊がなす魔力によるものであり、人間はしまいに其の霊のために生命をとられて了うぞ、と思うにいたる。彼にとって、文字の霊は人間の知性を広げ、空想や想像を豊かにして、幸福をもたらすものではなく、逆に人間を破滅に導く、呪われた恐ろしい精霊だということになる。そしてその魔力の核心に、分析病があるというのである。そしてエリバ博士も、最後にはこの文字の霊の復讐に遭って、大地震で自家の書庫が崩壊した時、数百枚の重い粘土板の書籍に押しつぶされて、死んでしまう。

『古譚』の主人公たちは、このようにして殺されたり、発狂したり、変身してしまったりと、全て自らの正常性と生命とを失ってしまう。彼らはいずれも、人間の臨界を踏み外すか、越え出てしまうことによって、悲惨な運命に陥るのであるが、これを悲惨とするのは、実はそのような運命を、客観的分析的に認知しようとする、意識そのものに基づいている事に、注目すべきであろう。作家中島は、これらの主人公の悲惨さに自ら身を寄せて、その苦痛や悩みを悲劇的に絶叫すると言うよりは、むしろ彼らを突き放して冷静に、その滑稽さを描き出すようなところも窺えるのであり、見ようによれば、高度に意識化された寓話の趣きと味わいが出ていると言える。それは特に「文字禍」に著しく表れているが、一方すでに指摘した逆説、つまり冷徹かつ鋭い分析的批評眼の徹底が、逆に純粋な唯美の心を表出する方法の良い例としては「山月記」に見ることが出来る。李徴は誰にも負けない烈しい詩人への願望を持ち、そのために一切を犠牲にしてしまって、身は異類となりながらも、その実作詩には、「どこか微妙な点に欠けるところ」があったことを、袁傪によって批評されている。李徴は決して悲劇的な英雄ではなかったのである。孤独な虎になった李徴が、月に向かって吼えるイメージを、私たちは何となく孤峰の絶壁での咆哮として見上げる視線で、思い描きがちであるが、作品の結末でのそれは、袁傪一行に見下ろされるところで実現しているのであり、李徴像とはこの意味で、悲劇的であるよりは、一層悲惨なのであり、英雄的であるよりは、運命に踏みつぶされたみじめな存在だったのである。この悲惨さに、純潔な唯美の心が発動するのは、中島自身の自己否定的なまでに突き詰められた、客観的分析的批評眼によるものであったと考えられる。後年の名作「李陵」などには、この特色が最も良く発揮されており、中島的文学表現の確立を、ここに認めることができるであろう。

そして以上のことは、中島の卒業論文のうちに、すでに彼自身が言及していたものでもあった。一九三二（昭和七）年一二月に

提出されたこの論文「耽美派の研究」は、四〇〇字詰原稿用紙で四二〇枚に及ぶ力作である。その内容は、まず耽美派一般の語義内容を西洋文学から説き起こし、日本の古典から近代にいたる文芸作品から、そのような傾向の見られる諸点を描き、近代以後、鴎外、上田敏を考察して、永井荷風、谷崎潤一郎についての論へと展開して、谷崎を高く評価する結論となっている。昭和七年当時、荷風も谷崎もまだ生きていたばかりか、その後も活動を持続したものであるが、それでも荷風と谷崎の本質をよく捉えているところがある。そして興味深いのは、彼は唯美派としてのボードレールを高く評価して、「結局、彼はたゞ、天国失墜の悲しみを抱いて、愈々切に神にすがろうとする悩みを増すだけである。此の矛盾が彼の詩である。だから、彼の詩には、強烈な宗教的と云っていゝ理想主義と醜悪な肉慾との独創的な調合が見られる。此の烈しい魂の苦悶と、それからも一つ、分析的科学的な精神と、此の二つのものこそ、これから考察する日本の耽美派に欠けて居る所のものである。日本の耽美派に見られるものは、あるひは東洋文人的な現実逃避であり、あるひは純然たる感覚への陶酔であり、静観的な生活享楽である。」[2]と述べているところで、魂の苦悶と分析的科学的な精神の欠落が、日本の唯美派にはないと指摘している。この点で、永井荷風は西洋自然主義の影響を受けて、科学的な観察法と実験的創作態度を学ぶ様子も見えたが、結局それらは東洋的虚無観に似たもので、抒情詠嘆的耽美享楽者へと推移したと論じたのに対し、谷崎には、今までになかった全く新しい「耽美的な空想と豊麗を極めた線の太い文章とが」実現したとして高く評価しているが、中島自身の資質は、官能や感覚美の世界に陶酔してのめり込んでいく谷崎よりも、自然主義的冷徹な批評眼を最後まで身に帯びた荷風に近いところがあったと言える。この点で、谷崎と中島は、「悟浄歎異」に描かれた悟空と悟浄との対照に似ているようである。中島は最後まで冷徹な批評眼から逃れることはできなかった。特にそれが自己存在にかかわるものである時、徹底した悲惨さを強調することになるが、そのことは同時に、その悲惨が向き合うべき超越的な者への視野を含み持っていることをも意味している。「悟浄歎異」の場合、その視野とは、三蔵法師の存在を介して永遠なるものの存在が想像されているところに、よく示されていて、そこに宗教的な要素さえ認めることができるであろう。

しかし客観的で冷徹な批評眼が、どうしてこのような超越的永遠なるものの存在を予想することになるのであろうか。実はここに篠田が注目した唯美をもとめる純潔な心がかかわっていると考えられる。特に「耽美派の研究」で、比較的詳しく論じられた上田敏とペイターとの関係に言及したところに注目したい。中島は上田敏の作品「渦巻」について、春雄の享楽主義を「生甲斐のある生活を送りたいと思ふものは、その意志の力を刪減して専ら智

力を研き感覚を鋭くする方に向ふ。而も単調で局促な一定の社会に居ては思ふ様な刺戟も得られないので、多くは芸術といふ自由広大の天地に心を放って思ふ存分に歓楽を求めるのである。過去現在の芸術の園を飛廻って馥郁たる芳香に酔ふことによって、人は、自己の生命を拡大し、倍加して、どうせ短い命の刻々を頗る緊張したものとすることができると云ふのである。」[3]と言うが、これはペイターの享楽主義とそっくりである、と指摘している。つまり上田敏の享楽主義は、智力を研き感覚を鋭くするところに特色があり、知的な面がより強く出ている。また「生を楽しまう。生活を豊富にしようといふのが春雄の絶えず熱望する所である。時と処との堅く取囲んだ牢獄を脱して、思想感情感覚を飽くまでも多く味ひたい。人間は永遠の一瞬間である。而もその瞬間の中に、不変不死の何物かがあって、個人は只ほんの暫くの間、其収益権を賦与されたにすぎない。（中略）此世に真の現実といへるものは、たゞ、一瞬間一瞬間の鋭い知覚であるが、はつと思ふ間に、其の知覚は消えて過去の闇に没して了ふ。人間の意味ある生活は此の消え易い刻々の知覚を充分に翫味し利用するにある。努力の最大多数が最も純粋に働いて居る其の焼点を逃さないにある。」[4]というのが春雄の享楽主義の内容である。これによれば、一瞬間の鋭い知覚のうちに「不変不死」つまり永遠に通じる純粋の「焼点」があるというので、あくまでも傍観的受動的ではあるが、知覚の永遠を繋ぎとめる知性の働きを重視していることが、理解できる。そして中島が言うように、上田敏はペイターの言説を、ほとんどここに展開していて、まさにそっくりである。たとえばペイターの「ルネサンス」の結論中、次の箇所をあげてみよう。

「ノヴァーリスは言う、哲学するとは遅鈍を取り去り生気を与えることである。人間精神に対する哲学の、言いかえれば思索的教養の寄与は、人間精神を覚醒・喚起して、倦まず弛まず観察をおこなう人生を営ましめるところにある。時々刻々、手や顔がある完全な形を得、山や海のある階調が他に優るものとなり、ある情調、ある直観、ある知的昂奮が抗しがたい真実性と魅力を感じさせる―それはただその一瞬だけのこと。経験の果実ならぬ経験そのものが目的なのであって、しかも多彩な劇的人生で、与えられるものといえば、数限りある脈搏にすぎない。最も繊細な感覚がこの脈動のなかに見るものすべてを、われわれはいかにして見ることができるのか。いかにすれば、一点から一点へ休息に移り動きながら、しかも最大多数の生命力が最も純粋なエネルギーをあつめる焦点につねにこの身を置くことができるのか。この固い宝石さながらの焔を絶えず燃やしつづけること、この恍惚の状態を維持すること、それが人生の成功にほかならない。」[5]

以上によれば、上田敏がペイターの一文をほとんどそのまま写していることも明かであろう。と同時に、上田敏やペイターの言うところが、美に耽溺する意味での唯美とは、性格が異なること

も見えてくる。一瞬間にせよ、「不変不死」や「永遠」に繋がる知覚、その発見が目指されていたのである。それが知的なものを土台としていることは、「固い宝石さながらの焔」というペイターの有名な言葉にも象徴されている。冷徹客観的な知的批評眼というのも、いわば冷たい宝石のような焔ということでもあろう。

さらに中島は、ペイターの影響を強く受けたオスカー・ワイルドの耽美主義についても言及し、彼が美を倫理道徳よりも高い所に位置づけたのは、「美は倫理よりも更に霊的な世界に属して」いるからだと指摘している。そしてワイルドの神秘的傾向が、獄に投ぜられて以後、次第に宗教的色彩を帯びた悲哀の感情にまで変化したと言い、そこに究極の耽美主義的段階があるとして、永井荷風の悲哀と比較しながら次のように述べている。「ワイルドのそれ（悲哀）は（荷風と違って）強烈な自意識が宗教的感情と相闘ふ『悲哀の美』であって、更に人間的に深い所にあるものと云へるであろう。」[16]

これらによって眺めれば、篠田が指摘した中島における唯美をもとめる純潔な心の内実が、どのような性格のものであったかが、ほぼ窺えるであろう。中島はこの卒業論文を提出した後、それほど過ぎないうちに「北方行」の創作活動に入ったと考えられているが、「北方行」には、確かに卒論で扱った自らのテーマを、創作によって実践しようとしたところがあった。それについては

すでに述べているので[17]、ここではふれないが、結局挫折に終わった原因には、彼の所謂唯美をもとめる純潔の心にかかわるものがあったことだけは、改めて指摘しておきたい。つまり霊的宗教的感情に対峙するまでの、冷徹客観的な批評眼の厳しさ、この持続そのものに挫折があったのである。

たとえば、これもすでに注目したところであるが、「北方行」ノートには、「自己の苦悩を表現することはいかに快楽であるか」という一文がある。「北方行」挫折の原因には、登場人物たちの苦悩が、詳しく表現されればされるほど、すべて同じような袋小路に陥ってしまい、一種の膠着状態になって動きが取れなくなったこと、しかもそこに快楽の要素も自覚されてきたことにあったようである。この時の快楽とは、一種の自己耽溺あるいは陶酔でもあって、それは本来中島が庶幾したヨーロッパ的唯美主義の、所謂冷たい宝石の焔の如き性格のものとは違ってきたはずである。特に異なるのは、霊的宗教的なものとの対立における、自己存在の否定にまで届く冷徹な批評性である。こうした自己存在の否定を通して、覚醒される不変不死のもの、あるいは永遠なるもの、それを望み見る視点が、「悟浄歎異」の結末に示された三蔵法師の人物像に活かされていたのではないか。「悟浄歎異」の歎とは、自己存在の否定性に対する歎きであると同時に、その否定を通して永遠なる者をのぞき見、賛嘆する一面も確実に見えるからである。この意味で「北方行」挫折を受けとめ得たのは、「悟

浄歎異」でもあったと考えられるのである。

注

① 篠田一士「中島敦伝」（文春文庫『李陵　山月記　檪檬　愛撫外一六篇』一九九九年六月、所収）

② 「耽美派の研究」（筑摩版全集、第三巻、一九七六年九月、一一頁）

③ 同右、四九頁

④ 同右、四七～四八頁

⑤ ペイター「ルネサンス」（別宮貞徳訳、冨山房、一九七七年八月、二四四頁

⑥ 注④に同じ、一六頁

⑦ 「中島敦論考」（一九八五年四月、桜楓社、参照）

追記

本稿は、キリスト教文学会九州支部夏季セミナー（二〇一一年八月一九日、梅光学院大学）でのシンポジウム「文学表現と人間の臨界」で、「中島敦を巡って」と題して発表したものと、一部重なるところがあることを、お断りしておく。